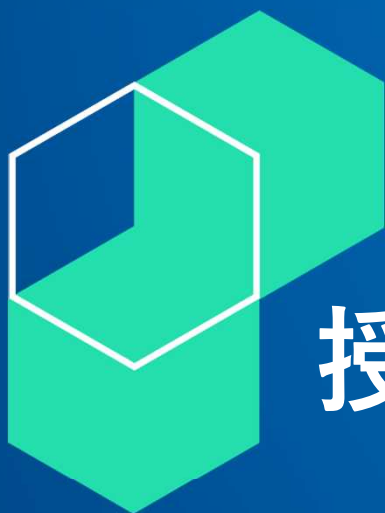




授業評価報告書

Course Evaluation Report



2024



鳴門教育大学
Naruto University of Education



高等教育機関である大学において、その教育の質を向上させることは重要な責務であり、その主要な部分を担っているのが他ならぬ授業である。したがって大学は、授業の検証、省察、改善を不断に行っていくことによって、教育の質の向上を図って行かなければならない。その際の貴重な資料となるものが、学生による授業評価アンケートである。

授業評価アンケートは、教員個々の授業改善に資するFDの一環として重要な位置を占めてきた。それに加えて現在では、社会（認証評価等）から求められる内部質保証、すなわち大学における組織的な教育改善に資する教学IRの一端の役割も担っている。本学では現在、教育実習・フィールドワーク・インターンシップ等の実習科目および卒業研究・課題研究・教育実践研究を除き、開講する全ての授業科目において学生の授業評価アンケートを実施している。

さて、授業評価アンケートは、2023年度から教務システムLiveCampusUの中で回答する形式に変更された。また、報告書の体裁についても、個々の授業についての結果の掲載を省き、学士課程、修士課程、専門職学位課程〈通学〉、専門職学位課程〈遠隔〉ごとに集計結果の概要を示す様式に変更した。それぞれの課程については、「授業の計画と内容について」「授業の進め方について」「授業への取組・満足度について」を共通の柱として、授業全体の傾向や課題を分析している。このように統一の観点で分析結果を示すことで、それぞれの課程の成果と課題を横断して比較できるようになっている。

鳴門教育大学では、セルフデザイン型学修を基本理念とするカリキュラムへの転換が図られている。アクティブ・ラーニングによる探究的な学び、オンライン授業など、新たな授業形態も充実してきた。このように大学の授業全体が大きな過渡期にあり、その中で一層の教学改善が望まれている。本報告書がその一助となれば幸いである。

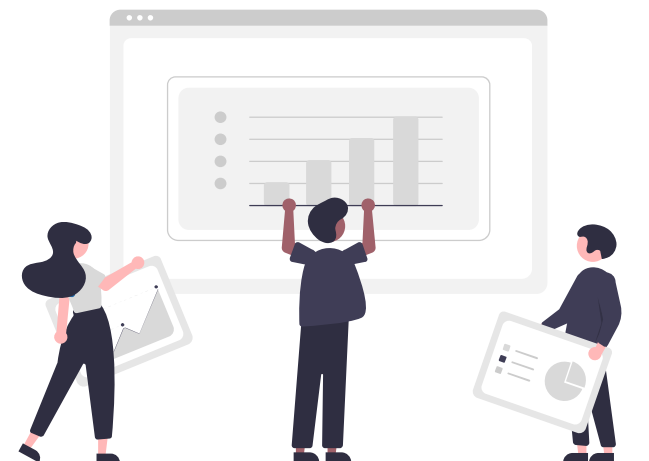
2025（令和7）年度 学校教育学部教務委員会及び大学院学校教育研究科教務委員会
学生による授業評価専門部会 主査 幾田 伸司



はしがき	・・・・・・・・	1
目次	・・・・・・・・	2
2024（令和6）年度授業評価の集計結果（概要）	・・・・・・・・	3
1.学士課程	[01] 授業の計画と内容について	4
	[02] 授業の進め方について	5
	[03] 令和5年度新設3科目群について	6
	[04] 授業への取り組み・満足度について	7
2.修士課程	[01] 授業の計画と内容について	8
	[02] 授業の進め方について	9
	[03] 授業への取り組み・満足度について	10
3.専門職学位課程＜通学＞	[01] 授業の計画と内容について	11
	[02] 授業の進め方について	12
	[03] 授業への取り組み・満足度について	13
4.専門職学位課程＜遠隔＞	[01] 授業の計画と内容について	14
	[02] 授業の進め方について	15
	[03] 授業への取り組み・満足度について	16
参考資料	[01] 授業評価実施要領	17
	[02] 授業評価報告書の作成体制	18
	[03] 授業評価報告書の作成スケジュール	19



1. 2024（令和6）年度授業評価の集計結果（概要）



課程	授業科目数（授業評価実施対象のみ）  =100科目	回答率（延べ回答者数／延べ受講者数）  = 1,000人
----	---	--

学士課程

469科目



49%（4,973人／10,165人）



修士課程

83科目



72%（1,085人／1,512人）



専門職学位課程（通学）

227科目



61%（1,531人／2,510人）



専門職学位課程（遠隔）

73科目



72%（660人／921人）

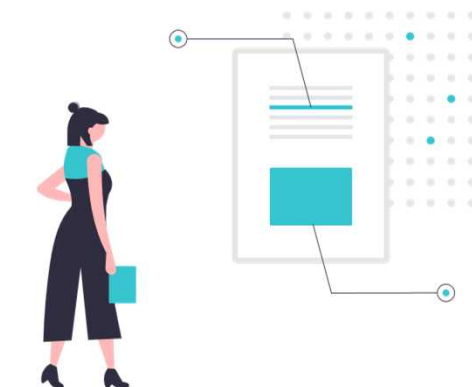


2023（令和5）年度後期から、教務システムLive Campus U上の授業評価アンケートメニューを活用し、回答に
取り組みやすくすることを通して、回答率の向上を図った。

全体としては、最も低い学士課程でも前年度の43%から49%に改善されており、オンラインでのアンケートと
しては順調な回答率を達成していると言える。また、前年度に課題であった遠隔課程の回収率も、令和5年度の
38%から令和6年度では72%と大幅に改善された。こうした改善については、教師による促し、授業時間内での回
答時間の確保、オンラインアンケートに学生が慣れてきたことなど、さまざまな要因が考えられる。オンラインア
ンケートは取り組みやすい反面、学生の自主性に委ねると回答率が下がる傾向がある。回答を促すような働きかけ
を継続することが大切である。

回答率を上げることとともに重要なのは、アンケートを通して各授業の成果と課題が正しく把握されることであ
る。授業によって回答率に差があることは、令和5年度でも課題として挙がっている。回答率の高い講義をロール
モデルとし、アンケートの設計や実施方法を継続して検討する必要がある。

[01] 授業の計画と内容について



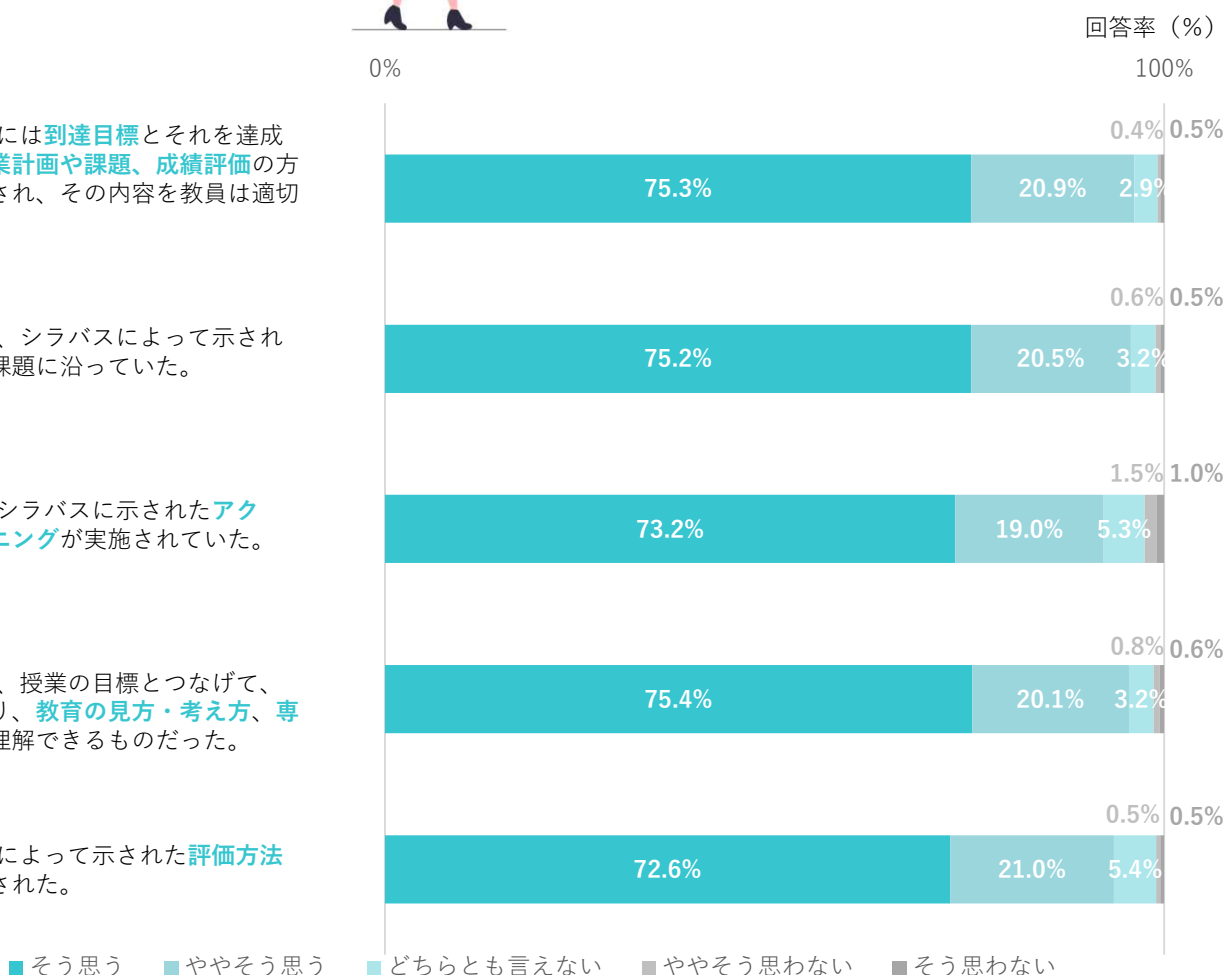
(1) シラバス等には**到達目標**とそれを達成するための**授業計画**や**課題**、**成績評価**の方法が明確に示され、その内容を教員は適切に説明した。

(2) 授業**内容**は、シラバスによって示された授業計画や課題に沿っていた。

(3) 授業では、シラバスに示された**アクティブ・ラーニング**が実施されていた。

(4) 授業内容は、授業の目標とつなげて、**教養**を深めたり、**教育の見方・考え方**、**専門的知識**等を理解できるものだった。

(5) シラバス等によって示された**評価方法**が適切に実施された。



全ての設問において**ポジティブな回答**「そう思う」「ややそう思う」の割合が92%を超える結果であった。特に、**(1)**96.2%、**(2)**95.7%、**(4)**95.5%の結果から、ほとんどの学生は授業がシラバスに準拠して実施され、**授業内容**も教育に関する知見を広げたり深めたりできるようなものであると受け止めていると言える。

一方、**(3)**については**ポジティブな回答**の割合が92.2%と、ここに示された項目の中では最も低い結果となった。また、「どちらとも言えない」と回答した割合が5.4%と高い。これは、実際に**アクティブ・ラーニング**が実施されていなかったと推察できるほか、指導者がアクティブラーニングを実施したと考えていたとしても、授業全体を通してアクティブラーニングを実施する割合が少ない場合、実施していたかどうか定かではないと思ったり、実施しているとまでは言えないと考えたりする学生もいたのではないかと推察される。

また、**(5)**については**ポジティブ回答**の割合が93.6%と、ここに示された項目の中では2番目に低い結果となった。「どちらとも言えない」と回答した割合が5.4%と高いため、**具体的な評価の仕方**が学生には分からないようになっていたと推察される。

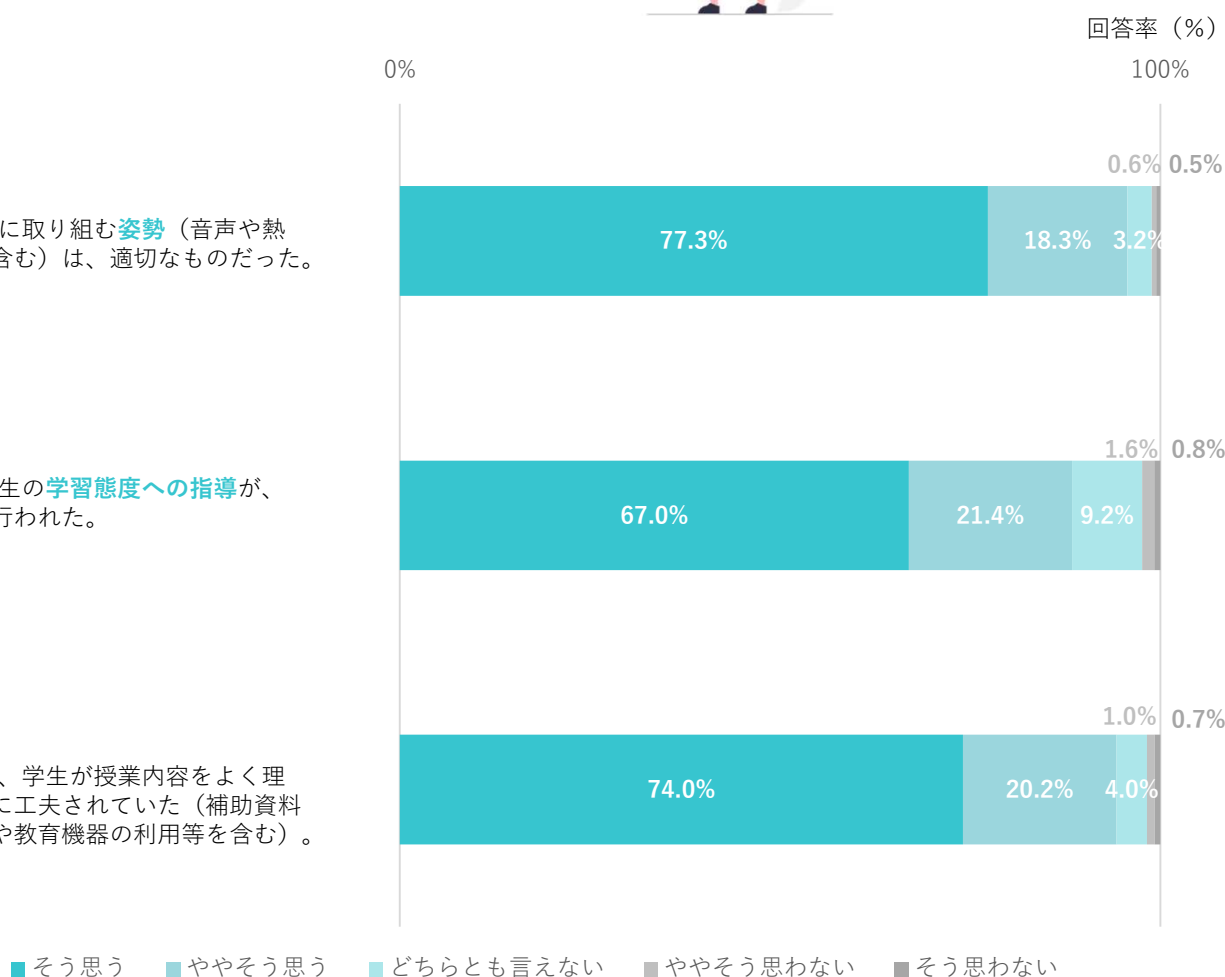
[02] 授業の進め方について



(6)教員の授業に取り組む姿勢（音声や熱心な態度等を含む）は、適切なものだった。

(7)私語等の学生の学習態度への指導が、必要に応じて行われた。

(8)授業方法は、学生が授業内容をよく理解できるように工夫されていた（補助資料の配付・活用や教育機器の利用等を含む）。

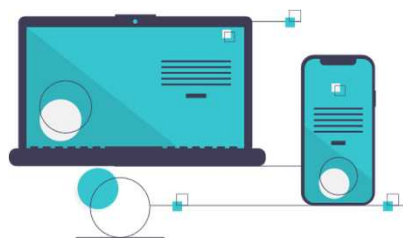


(6)、(8)においてポジティブな回答「そう思う」「ややそう思う」の割合が94%を超えており、ほとんどの学生が「本学の教員は授業に取り組む姿勢が適切であり、授業方法もよく理解できるように工夫されていた」と受け止めていると言える。この結果は、本学の学位授与方針ならびに教育課程方針に則した適切な授業が実施できていることを示唆していると考えられる。

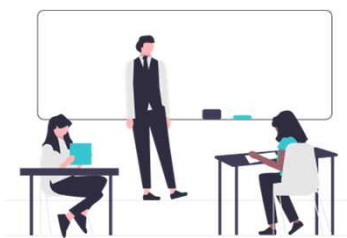
一方、(7)ではポジティブな回答の割合が88.4%と一番低い結果となった。また、「どちらとも言えない」と評価した回答者は9.2%と最も高い結果となった。前述の(6)、(8)の結果から、学生の私語等の行動は授業の妨げになるような程度のものではないと推察されるが、教員がそれらに適切に対応しているとは言えないと考える学生が10%以上おり、それらの学生の中には特性上、私語等の行動があると授業に集中しにくいという者もいることは否定できない。教員がパワハラやアカハラに対して細心の注意を払っているため、適切に対応することに消極的になっている面もあると推察されるが、様々な工夫をして対応していく必要があると言える。

[03] 令和5年度新設3科目群について

ICT活用指導力育成科目群



現代的教育課題対応コア科目群



初年次教育科目群



(9) ICT活用指導力育成科目群：

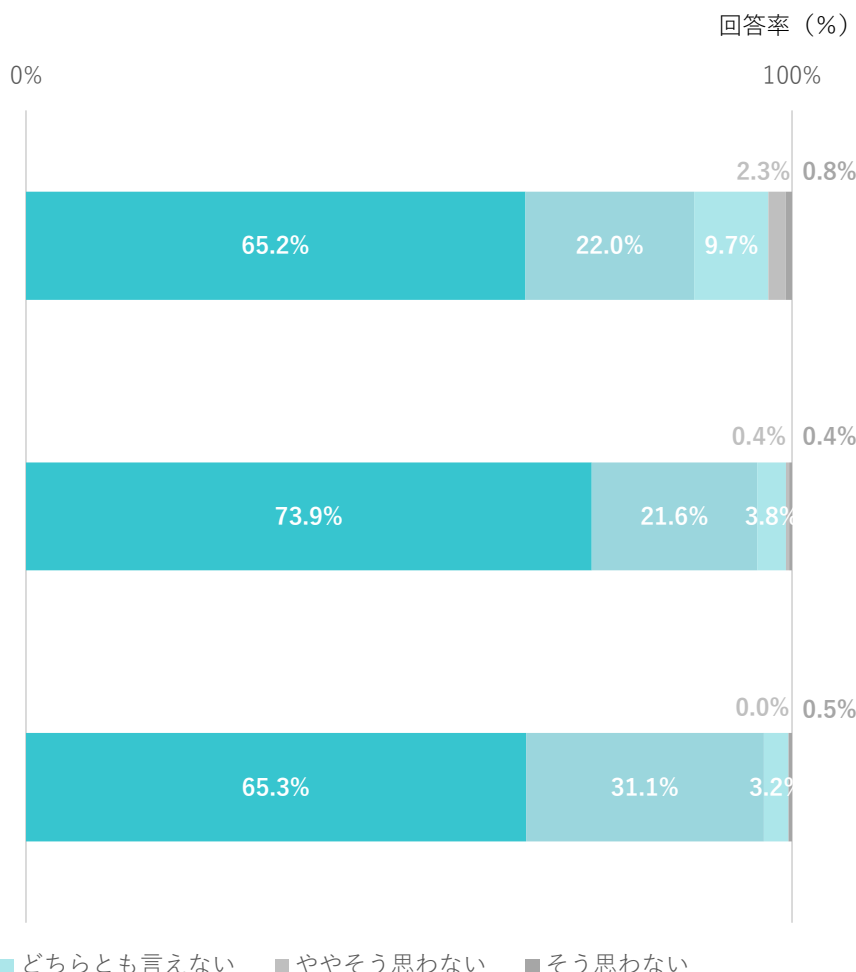
今日の学校教育を踏まえ、教員に求められる情報通信技術（ICT）活用指導力を学ぶことができる授業内容だった。

(10) 現代的教育課題対応コア科目群：

社会における多様化・個別化する課題（例：ダイバーシティ・国際理解教育・発達の多様性・いじめ問題等）とその現状を理解でき、課題の解決に必要な手立てや基本的態度を学ぶことができる授業内容だった。

(11) 初年次教育科目群：

鳴教大生としての学修の基礎となる見方・考え方、学び方、態度を身に付けることができる授業内容だった。

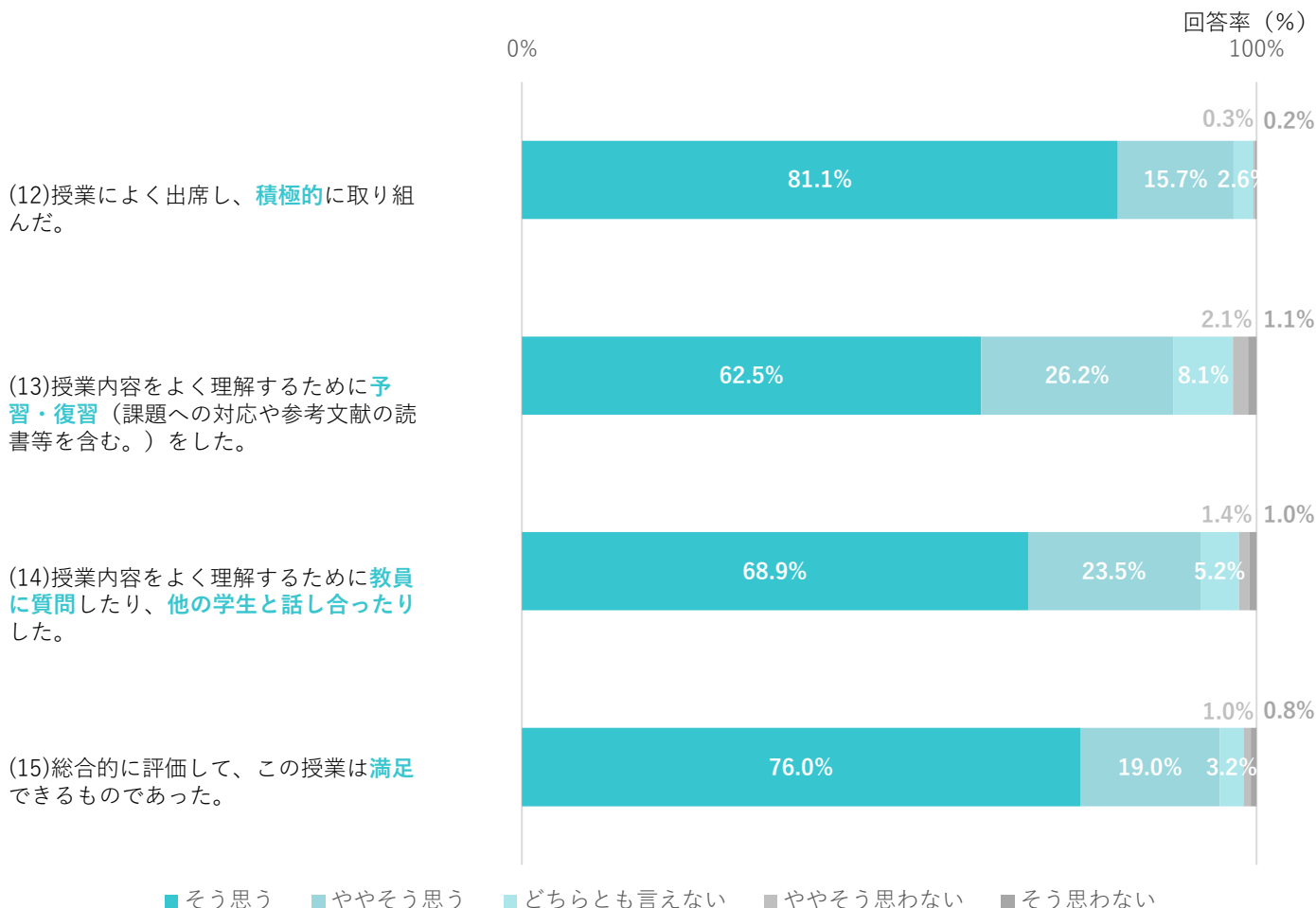
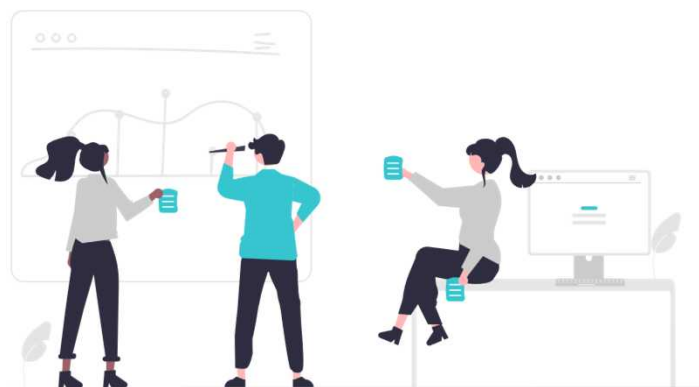


設問（10）「現代的教育課題対応コア科目群」では、**ポジティブな回答**（「そう思う」「ややそう思う」）が95.5%に達し、高い評価が得られている。現代的教育課題（ダイバーシティ、いじめ、国際理解など）に関する理解や態度形成において、当該科目群が大きな役割を果たしていると考えられる。

次に、設問（11）では、**ポジティブな回答**が回答者全体の96.4%を占めている。この結果から、初年次教育科目群が一定の教育的効果を有していることが示唆される。ただし、設問（11）の問いは包括的であり、「鳴教大生としての学修の基礎がどの程度身についたか」を細かく測定できるものではない点には注意が必要である。今後、より高い精度で教育効果を可視化するためには、設問の構造や尺度の解像度を高める工夫が求められる。

一方、設問（9）「ICT活用指導力育成科目群」については、**ポジティブな回答**が回答者全体の87.2%と、他の科目群に比べて相対的に低い値を示している。これは、**学習内容の難易度**が学生の実態とかけ離れていた可能性や、「教員に求められるICT活用指導力」という**目標に対する認識**が教員側と受講者側とで一致していなかった可能性が考えられる。

[04] 授業への取り組み・満足度について



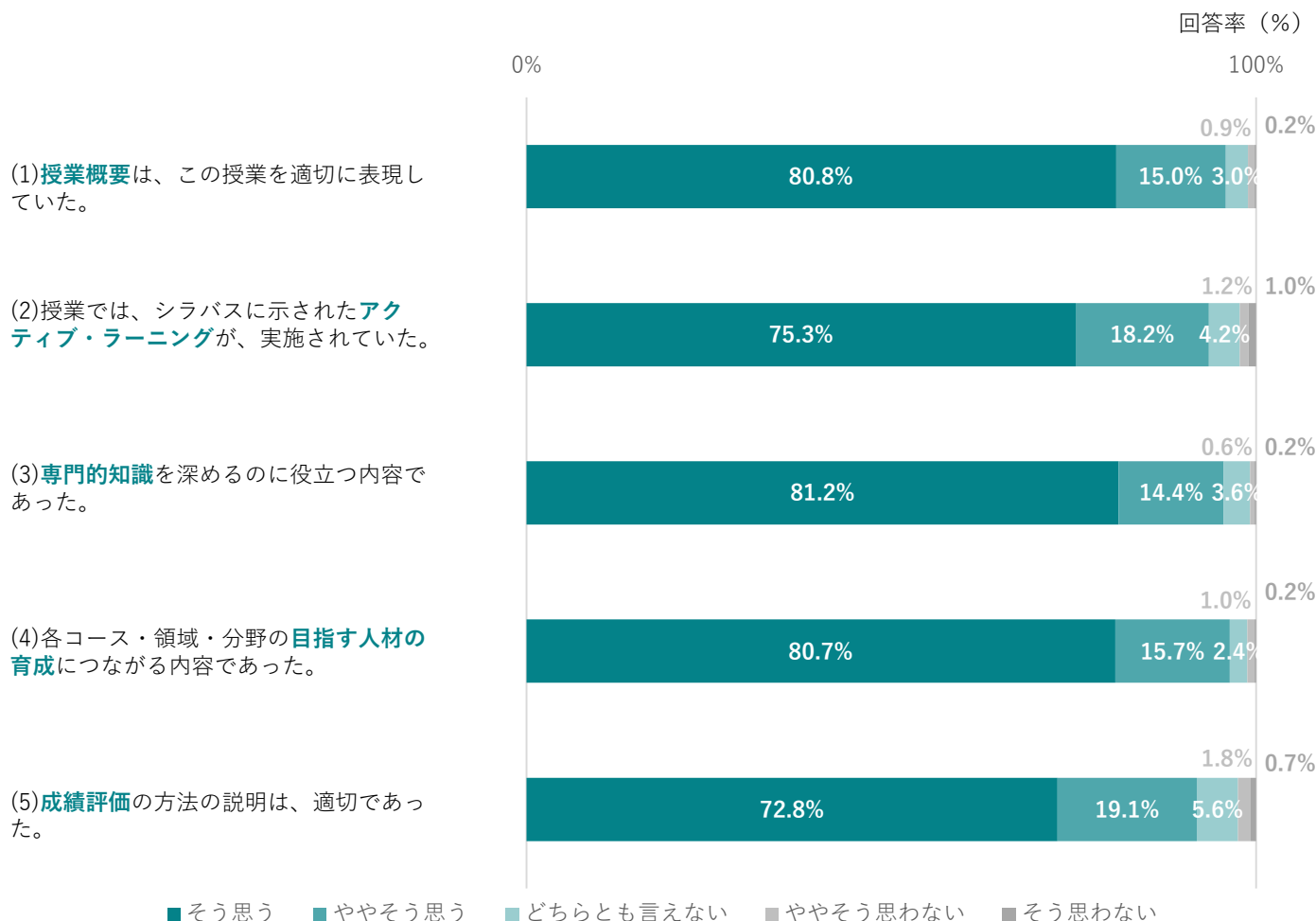
本項目群では、**全ての設問**において**非ネガティブ回答**（「そう思う」「ややそう思う」「どちらとも言えない」）の割合が96%を超える結果となった。ただし、本項目群は回答者が自身の取り組みについて評価している点、すなわち自己評価である点に注意する必要がある。

まず、設問**(12)**では、**ポジティブな回答**（「そう思う」「ややそう思う」）が96.8%に達しており、回答者が積極的に授業に取り組んだと評価していることがわかる。この結果は、授業が**適切な水準**で実施され、**適切な授業形態**が採用されていることを裏付ける数値と解釈できる。

次に、設問**(13)**では、11.3%の回答者が授業の予習・復習について**非ポジティブ**な回答をしており、本項目群の中では最も高い値となった。この値は「授業で採用されている学習指導法（授業で指定されている予習・復習の方法）の適切さ」に影響を受けて変動するものと考えられる。

他方で、設問**(14)**および**(15)**では、**非ネガティブな回答**がそれぞれ97.6%および98.2%を占めている。この値は、回答者の**学習環境（授業の形態）**が回答者にとって適切なものであったかをよく表す指標となっている。

[01] 授業の計画と内容について

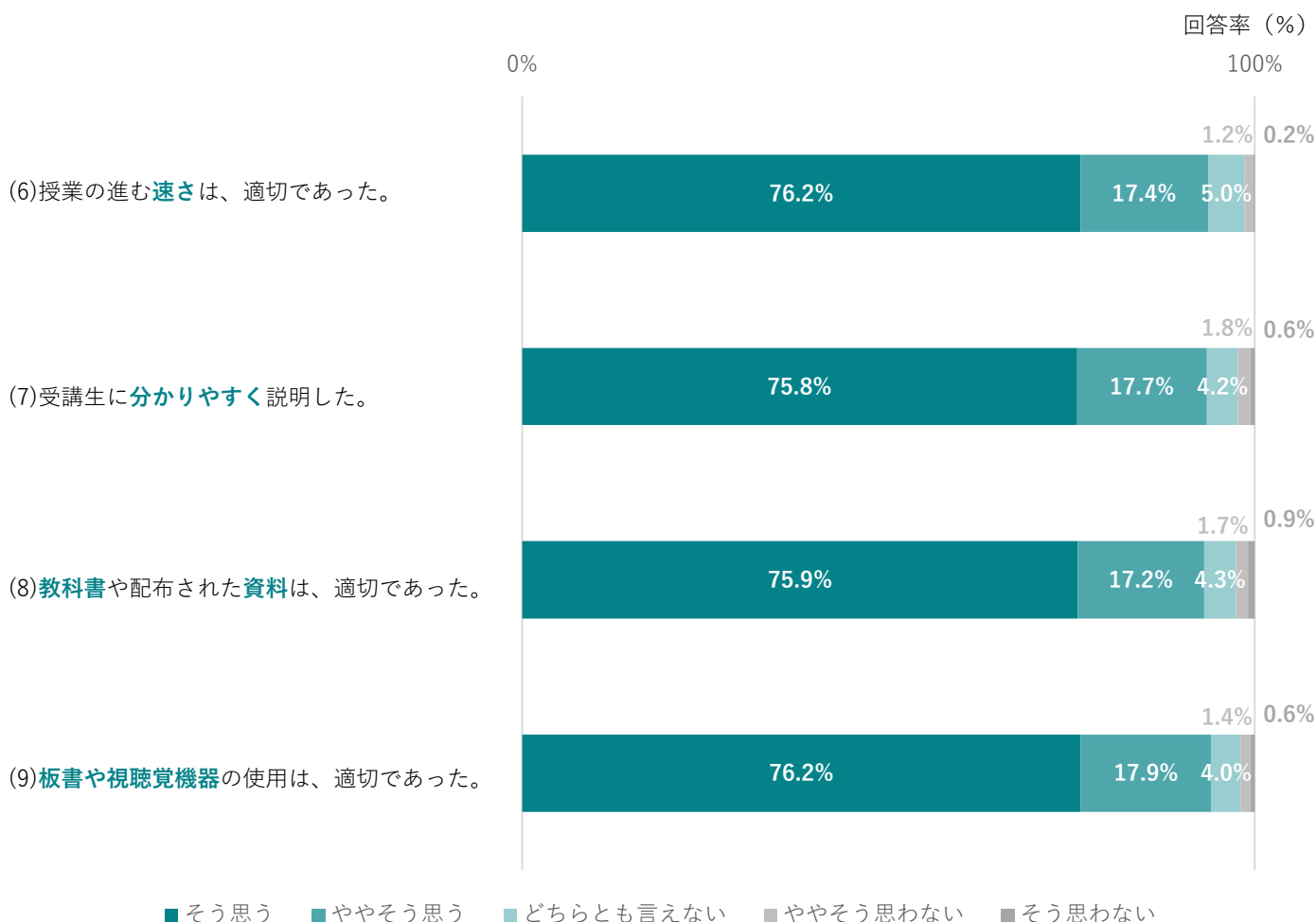


全ての設問での設問でポジティブな回答（「そう思う」「ややそう思う」）の割合が90%を上回っていた。特に計画と内容についての設問(1)、(3)、(4)の3項目ではポジティブな回答が95%以上を占め、ほとんどの学生が授業について、授業概要の表現は適切で、専門的知識を深めるのに役立つ内容で、各コース・領域・分野の目指す人材の育成につながる内容であったと評価していたと思われる。

一方、設問(2)では93.5%、(5)では91.9%と、他の項目よりやや評価が低く、ポジティブな回答の内訳を見ても「そう思う」がそれぞれ75.3%、72.8%で80%を割り、「ややそう思う」はそれぞれ18.2%、19.1%と20%に迫っていた。

よって授業計画と内容についての課題は、シラバスに示されたアクティブ・ラーニングをより適切に実施し、授業評価の方法をより適切に説明することであり、教員個人の努力任せでなく大学としてシラバスの記載や成績評価の説明のポイントをわかりやすく提示し、チェックリストを利用するなど何らかの方策を講じる必要がある。

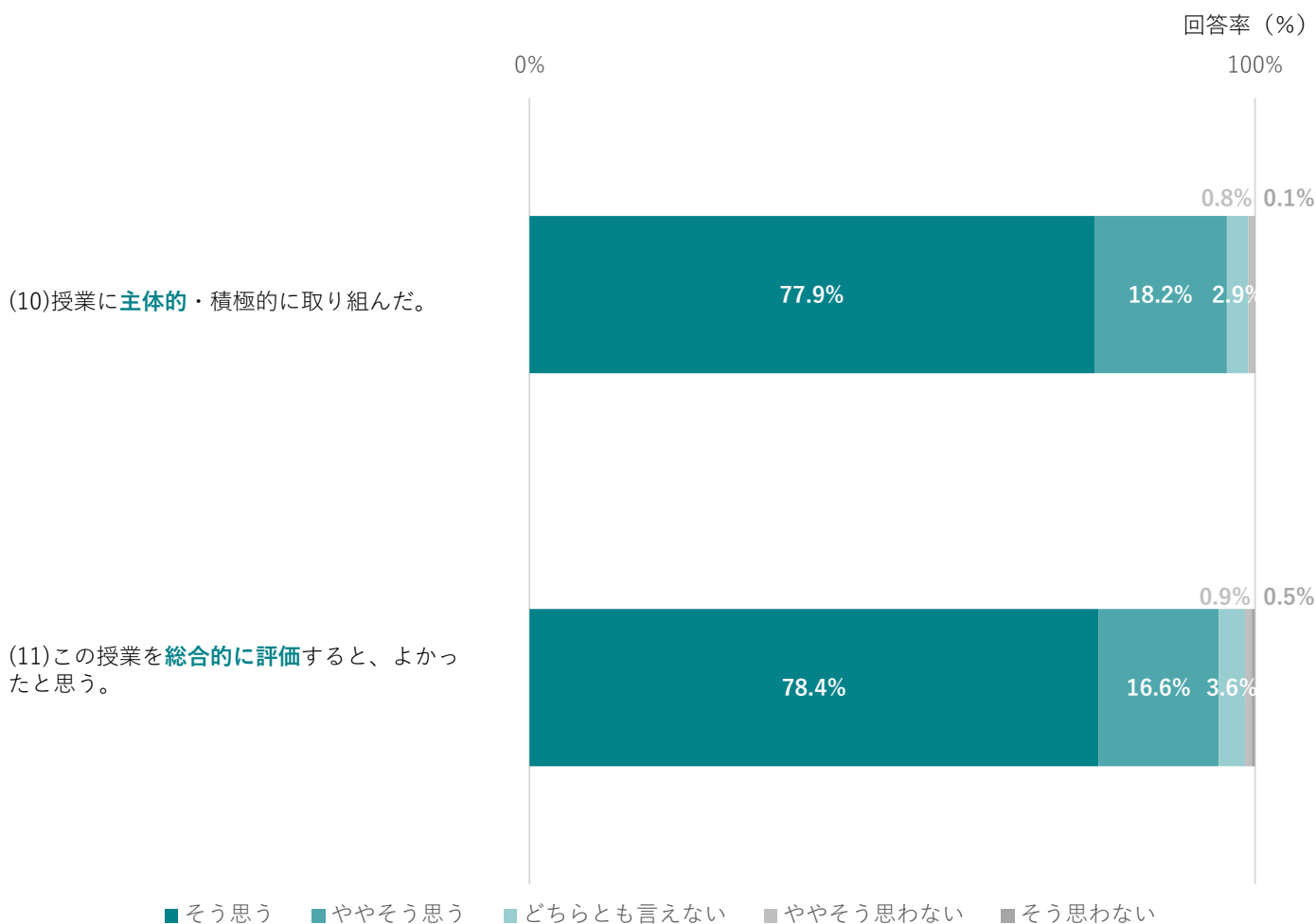
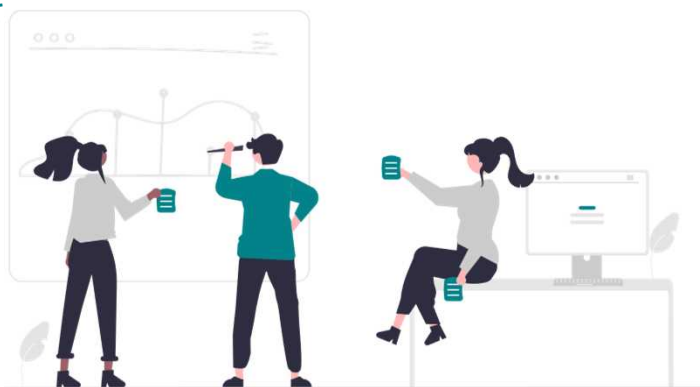
[02] 授業の進め方について



全ての設問での設問で**ポジティブな回答**（「そう思う」「ややそう思う」）の割合が93%を上回っていた。よってほとんどの学生が授業の進め方について、授業の進む速さ、分かりやすさ、教科書や配布資料、**各コース・領域・分野の目指す人材の育成につながる板書や視聴覚機器の使用**は適切であったと評価していたと思われる。ただし**ポジティブな回答**の内訳を見ると「そう思う」がそれぞれ約75%、「ややそう思う」は約17%であり、前項（[01] 授業の計画と内容について）に比べ「そう思う」の回答率がやや低く、「ややそう思う」の回答率が高くなっており、今後は「そう思う」の回答率が80%以上になることを目指したい。

2025（令和7）年度に共通講義B棟が改修され、より充実した教育環境が整備されたことに伴い、改修後の講義室の機器を活用した授業の実施のノウハウや、教科書や配布資料について紙ベースから電子媒体への移行などに関して、**大学として教員をサポートする取り組み**が求められる。

[03] 授業への取り組み・満足度について

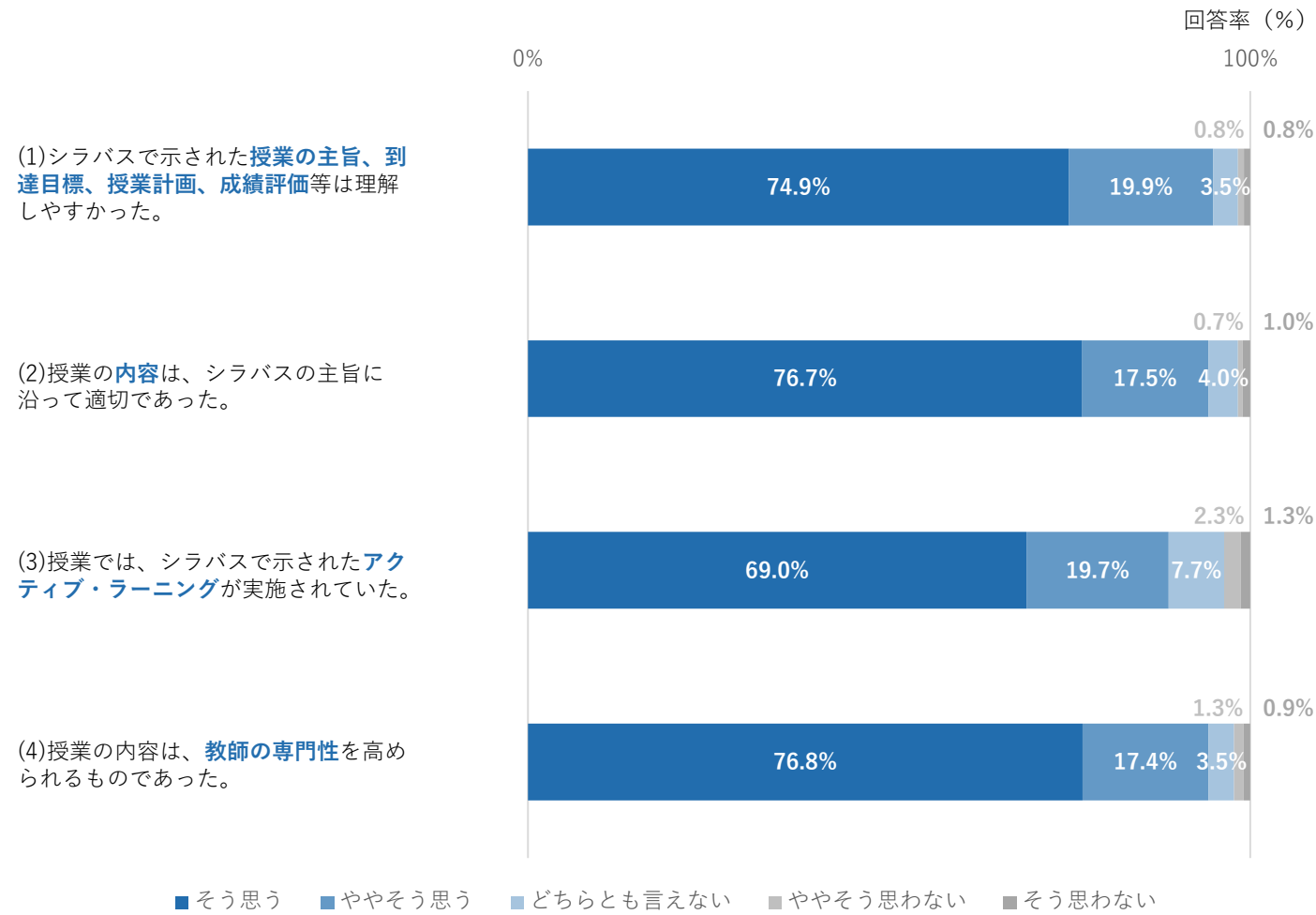
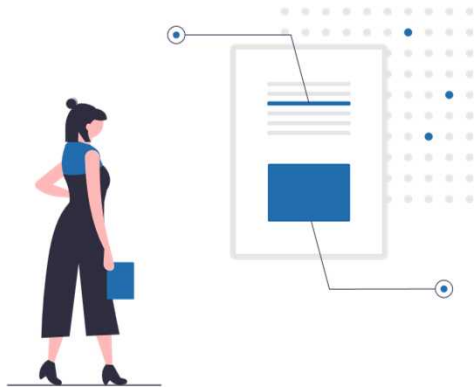


全ての設問での設問で**ポジティブな回答**（「そう思う」「ややそう思う」）の割合が95%を上回っていた。よってほとんどの学生が授業に**主体的・積極的**に取り組み、授業を相互的に「よかった」と評価していたと思われる。

設問(10)(11)の2項目については、「そう思う」（強い肯定的回答）の前年度比下げ幅がそれぞれ(10)△5.0ポイント、(11)△6.2ポイントであった。ただし設問(10)、(11)とも、**ポジティブな回答**の内訳を見ると「そう思う」がそれぞれ約78%と80%をやや下回り、「ややそう思う」は約17～18%で20%近くとなっており、[01] 授業の計画と内容についてへの回答に比べ「そう思う」の回答率がやや低く、「ややそう思う」の回答率が高くなっており、今後は「そう思う」の回答率が80以上になることを目指したい。

学生の意欲や動機づけ、総合的な評価に係る授業改善についても、教員の個々の努力に期待するだけでなく、**大学としての包括的な取り組み**や、**システムを実効的に運用する視点**が必要だと思われる。

[01] 授業の計画と内容について

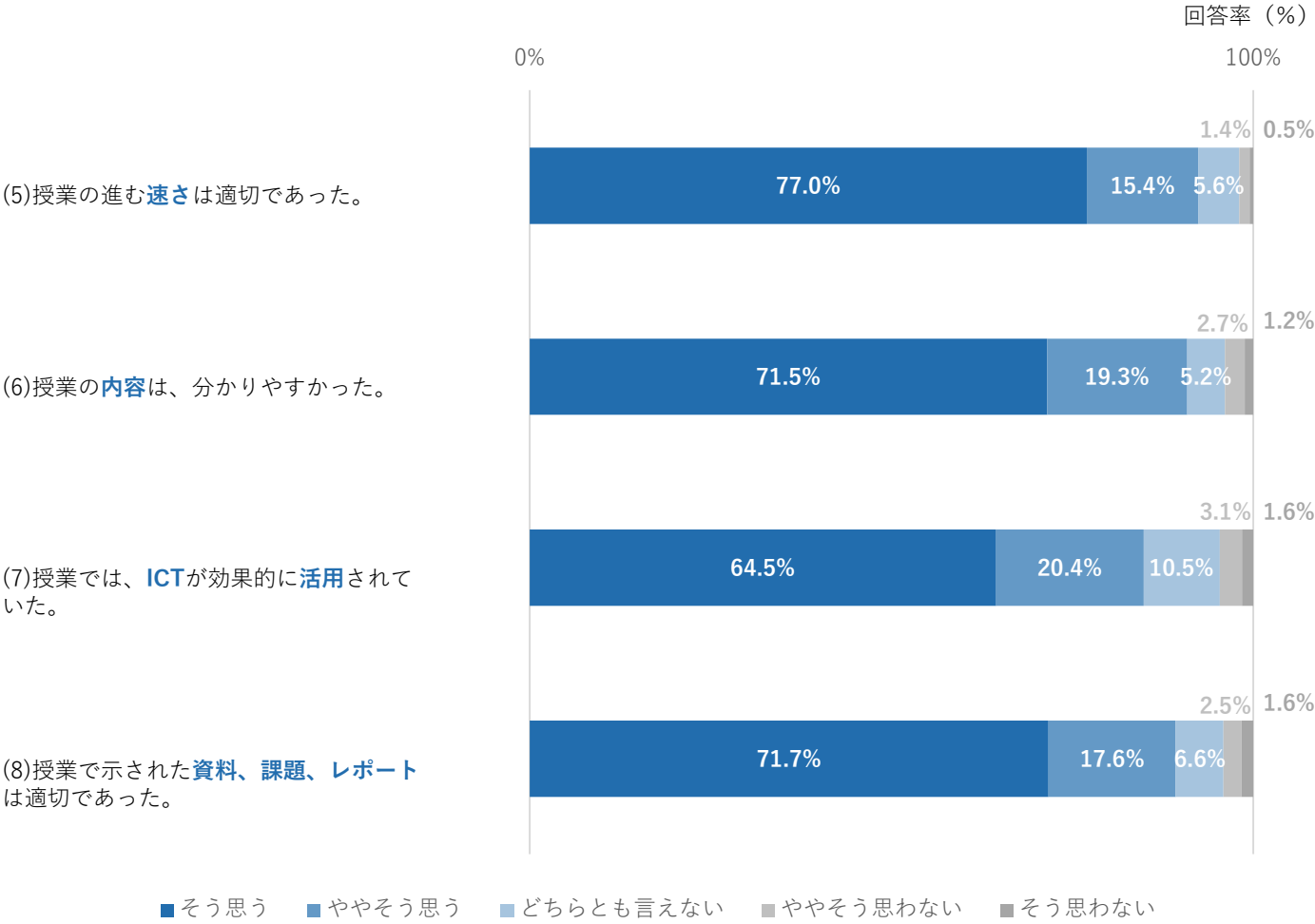
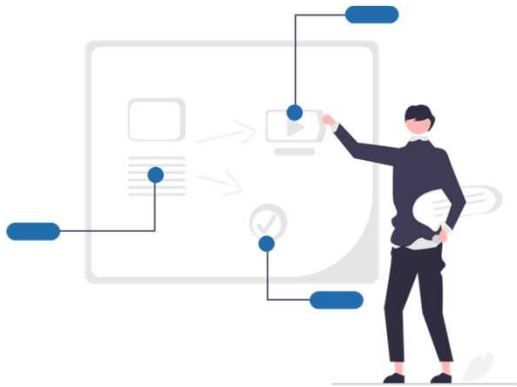


本項目群では、**全ての設問**において**非ネガティブ回答**（そう思う、ややそう思う、どちらとも言えない）の割合が96％を超える結果となった。とりわけ、**(1)** 98.4％、**(2)** 98.3％、**(4)** 97.8％の**非ネガティブ回答**から、授業科目の内容が**シラバスに準拠して体系的**であることが示唆される。

一方で、設問**(3)**についてはその他の項目の平均値に届かない結果となり、**ポジティブ回答**（そう思う、ややそう思う）の比率も全項目中で最も少なくなっている。考えられる要因としては、実際にアクティブ・ラーニングが実施されていなかったと解釈できる他、アクティブ・ラーニングがこういったものなのか回答者・指導者が理解できていないという可能性も否定できない。アクティブ・ラーニングをはじめとした**適切な学習指導法のより一層の活用促進**が期待される。

昨年度のアンケート結果と比べると、いずれの項目も**ポジティブ回答**の割合が向上しており、**昨年度と同等以上の授業水準が継続的に確保されている**と評価できる。

[02] 授業の進め方について



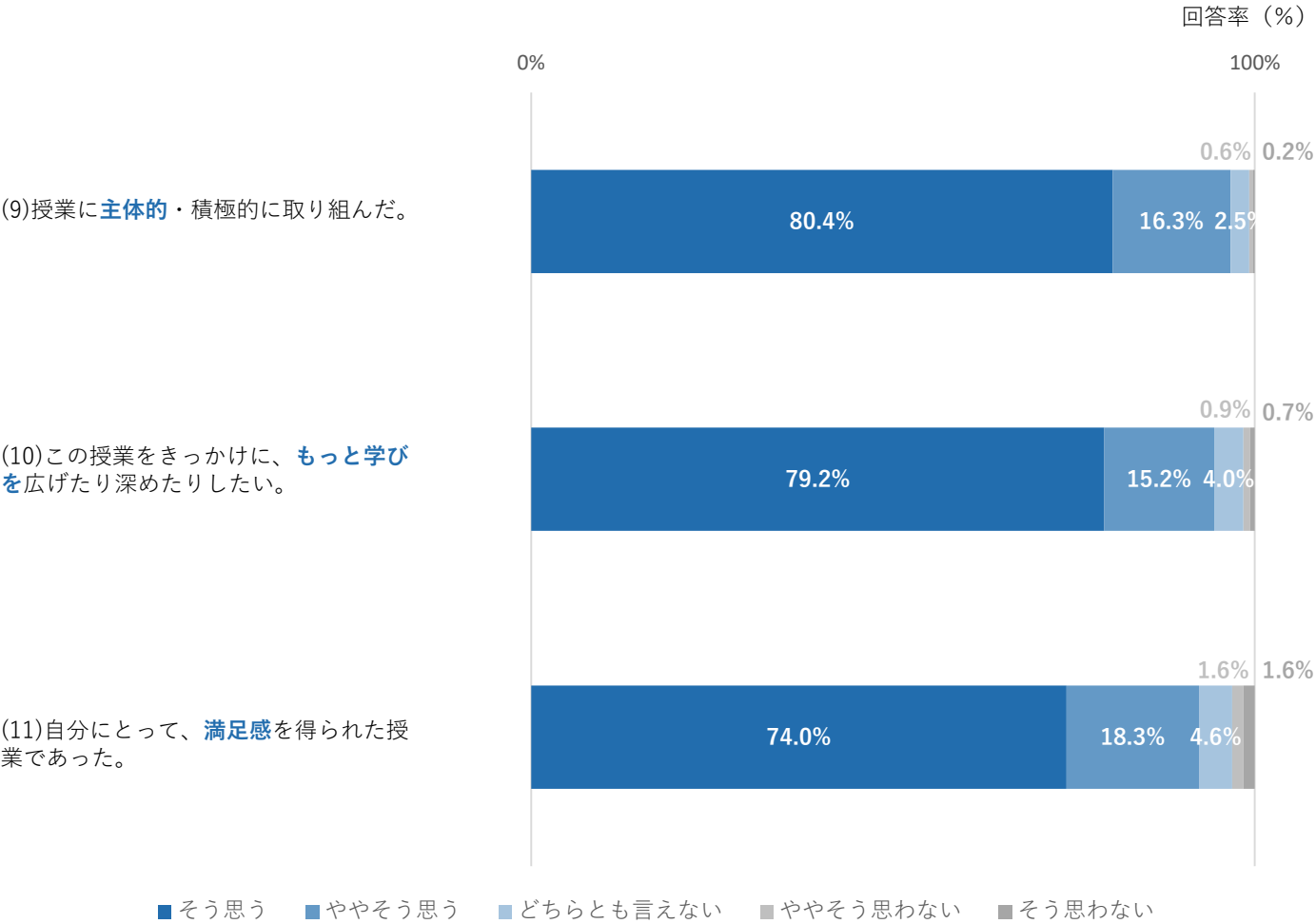
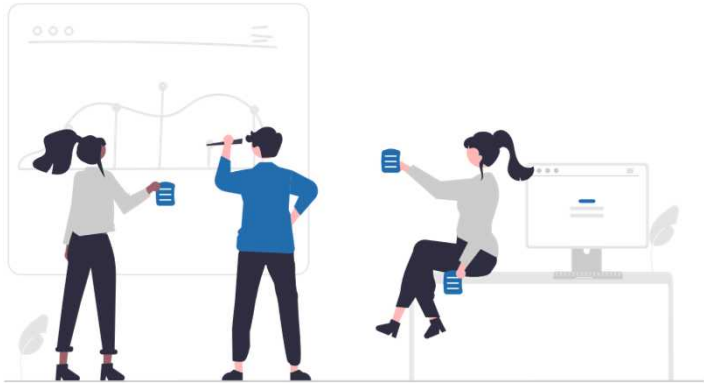
本項目群では、**全ての設問**において**非ネガティブ回答**の割合が 95 % を超える結果となった。

設問 (5)、(6) および (8) の結果から、各授業科目における受講生の**学修達成度**が適切であるとうかがえる。また、3. [01] の項目群で確認した通り、授業内容は概ねシラバスに準拠して体系的であるため、授業科目で期待される**学習成果が計画通りに達成**されている可能性が高いと考えられる。

他方、設問 (7) の結果から、**ICT の効果的な活用において改善の余地**が示唆されている。受講生の多くはすでにデジタルネイティブ世代であるため、教職員の FD・SD を通した**ICT 活用スキルの一層の向上**が課題といえる。とりわけ、教育現場における ICT 環境の整備が進む中で、教職員側の適応が後手に回っている可能性も否定できず、学生の期待とのギャップをうかがえる。

3. [01] の項目群同様に、昨年度のアンケート結果と比していずれの項目も**ポジティブ回答**の割合が向上しており、**昨年度と同等以上の授業水準が継続的に確保されている**と評価できる。

[03] 授業への取り組み・満足度について



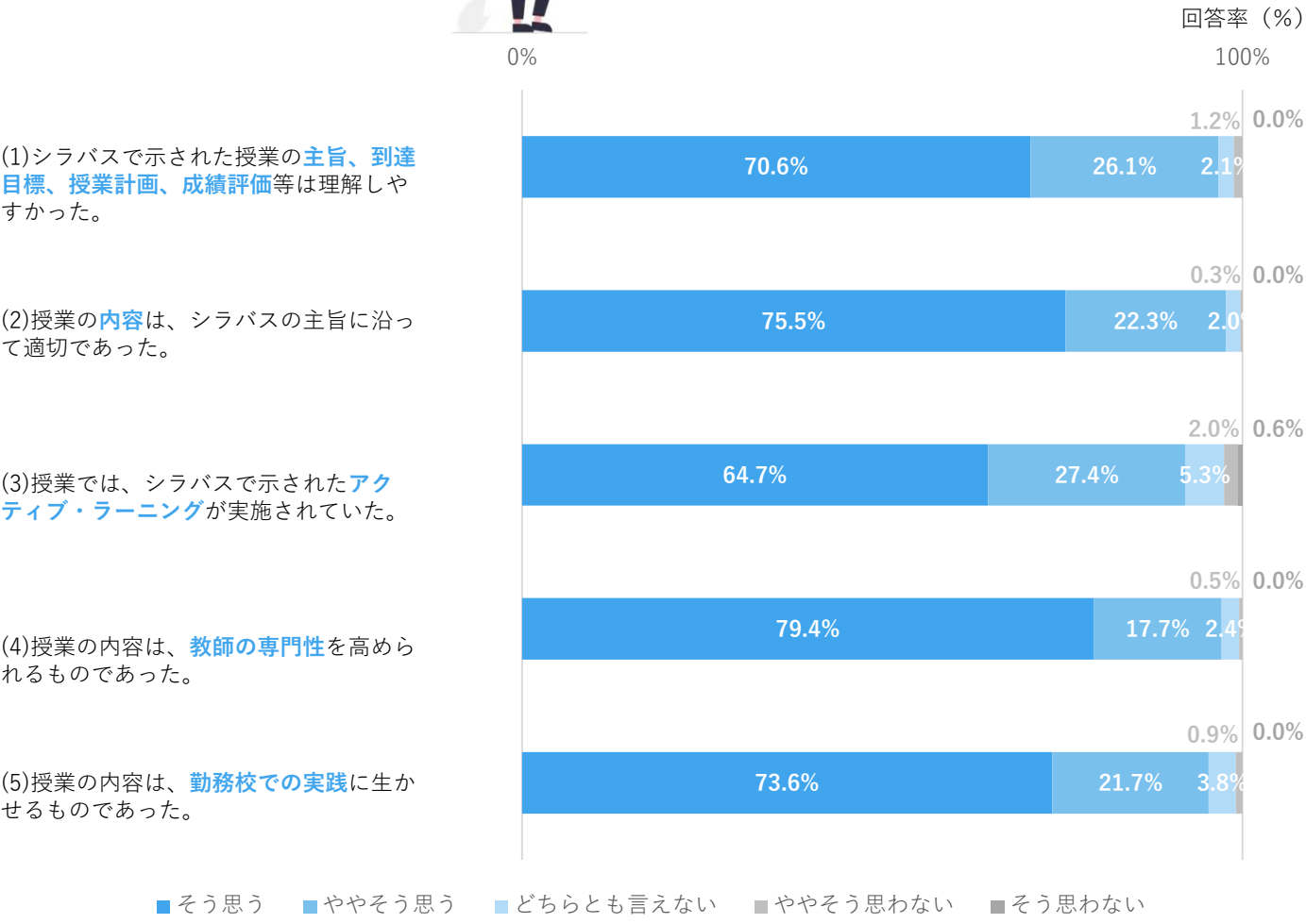
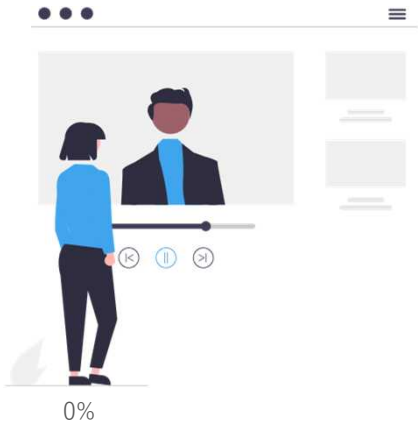
本項目群では、**全ての設問**において**非ネガティブ回答**の割合が 96 % を超える結果となった。

設問 (9) および (10) の結果から、受講生の学びに対する姿勢が積極的であり、3. [02] 項目群でみた適切な授業進行の結果が反映されたものとうかがえる。

他方で、設問 (11) の**ポジティブ回答**はその他の項目に比べて数ポイント劣っている。考えられる要因として、設問 (7) の結果から示唆された ICT 活用への期待感におけるギャップや、授業内容が受講生にとって平易すぎるという可能性も挙げられる。

3. [01] の項目群同様に、昨年度のアンケート結果と比していずれの項目も「**そう思う**」の回答割合が 15 ポイント以上向上しており、**昨年度と同等以上の授業水準が継続的に確保されている**と評価できる。併せて**ネガティブ回答**（ややそう思わない、そう思わない）の割合も全項目で減少しており、**適切な授業形態に実現**が示唆されている。

[01] 授業の計画と内容について



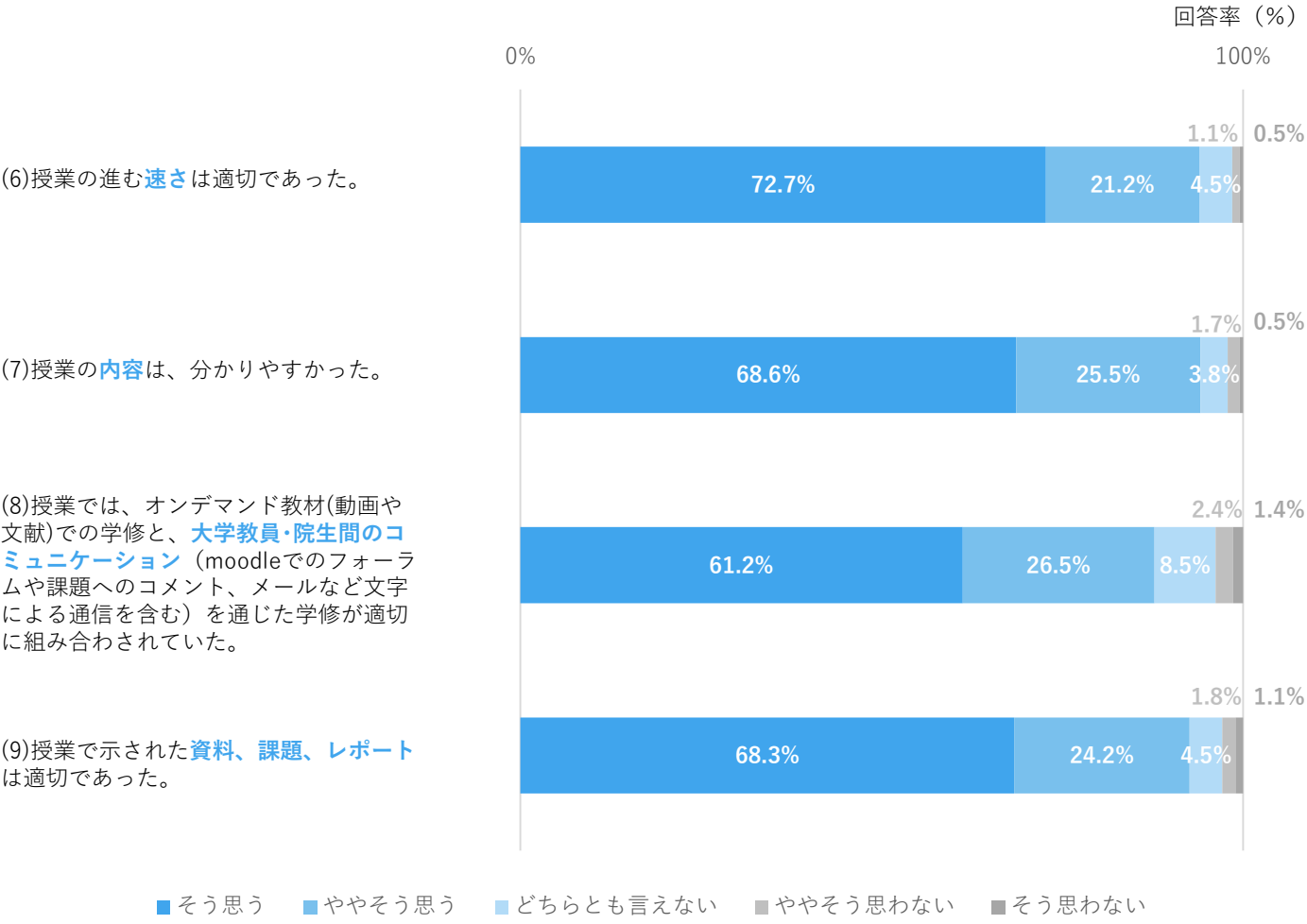
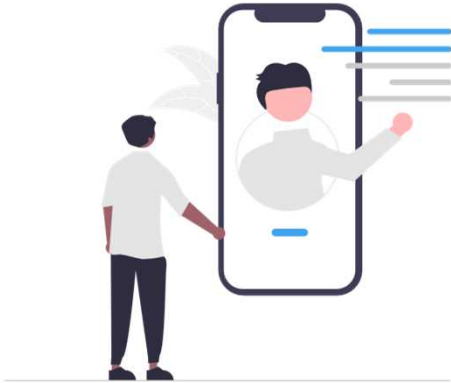
設問(1)と(2)では、「そう思う」「ややそう思う」の合計がそれぞれ96.7%、97.8%と非常に高く、授業の設計や内容がシラバスに沿って適切に構成されていることが評価された。特に設問(2)は「そう思う」の割合が最も高く、**授業内容の整合性が高い**ことが示唆される。

設問(3)では、「そう思う」「ややそう思う」の合計は92.1%と高いものの、「どちらとも言えない」「否定的回答」が7.9%と他の設問よりも多く、実施状況にばらつきがあることが伺える。遠隔授業では、オンデマンドやオンライン形式が主であるため、アクティブ・ラーニングの実施には工夫が求められる。授業者が**どの活動がアクティブ・ラーニングに該当するか**を明確に伝えることの重要性が示唆される。

設問(4)では、「そう思う」「ややそう思う」の合計が97.1%と非常に高く、授業が**教員としての専門性を高める**内容であると評価されている。遠隔教育でも専門性の育成が十分に図られていることは、**教育の質の高さを示す**指標になっているといえる。

設問(5)では、「そう思う」「ややそう思う」の合計が95.3%と高く、授業内容が**実務に直結**していることが評価されている。実践的な内容が含まれていることは、専門職学位課程の**目的に合致し、今後もこの遠隔教育を継続・強化していくことの有用性**を示唆している。

[02] 授業の進め方について



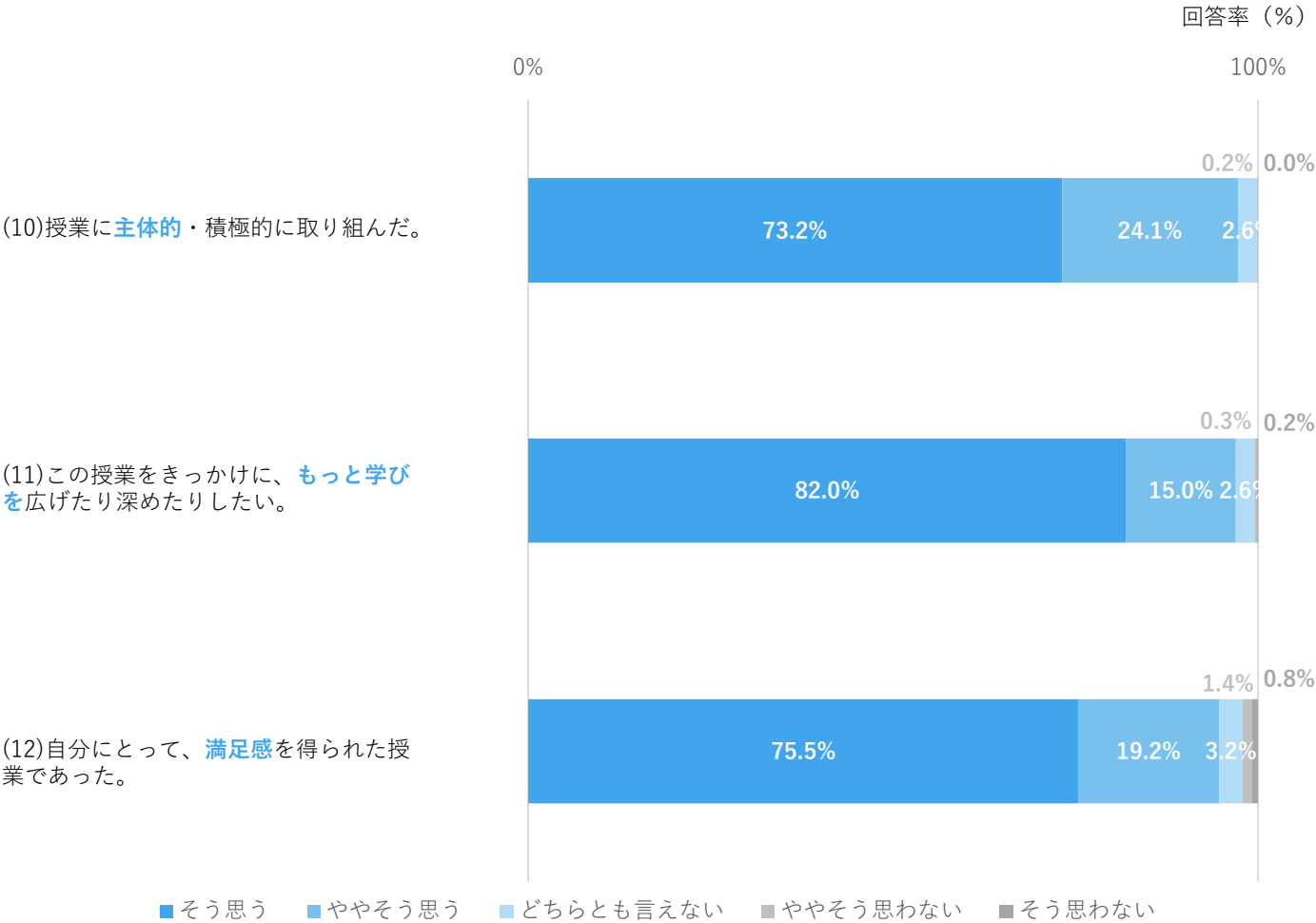
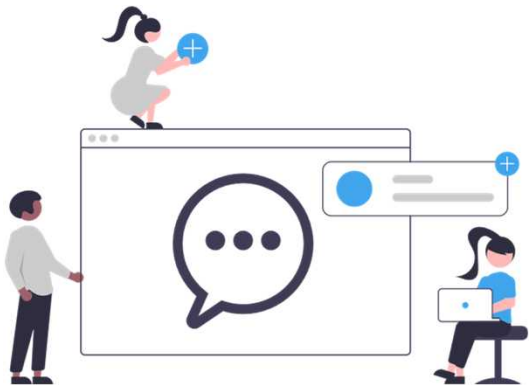
設問(6)では、「そう思う」「ややそう思う」の合計は93.9%と非常に高く、**授業のテンポ**に対する満足度は高い。遠隔授業においても、受講者の**生活リズムや学習スタイルに配慮した進行**がなされていると評価できる。

設問(7)では、**ポジティブ回答**は94.1%と高いが、「そう思う」の割合は68.6%とやや低めの結果が表れた。**遠隔授業特有の制約**（非対面での説明の限界など）が影響している可能性がある。今後は、視覚的補助資料、チャット機能、リアルタイムな質疑応答の場面の活用など、**理解を促進する工夫**が求められる。

設問(8)では、「そう思う」「ややそう思う」の合計は87.7%と比較的高いが、「どちらとも言えない」「否定的回答」が12.3%と他項目より多い。オンデマンド教材と教員・院生間のコミュニケーションのバランスに課題があると考えられる。特に、勤務校での業務後に学修する院生にとって、**柔軟な対応（メタバース等を用いた学習環境構築）や個別支援（教員・アドバイザー等による学習支援）**が重要である。

設問(9)では、「そう思う」「ややそう思う」の合計は92.5%と高い評価を得た。ただし、否定的回答（ややそう思わない+そう思わない）が2.9%あり、**資料の質や量、提出方法**などに改善の余地があると考えられる。専門職学位課程（遠隔）における授業の進め方は、全体として高く評価されている。特に**授業の進行速度や資料の適切さ**は好意的に受け止められている。他方、オンデマンド教材とコミュニケーションの組み合わせに関しては、受講者の**多様な状況に応じた柔軟な対応**が求められる。

[03] 授業への取り組み・満足度について



設問(10)では、「そう思う」、「ややそう思う」は97.3%と非常に高く、遠隔授業でも学生の**積極性が高い**ことが示された。「そう思う」が73.2%と高い一方で、「ややそう思う」が24.1%とやや多めであることから、完全に主体的とは言いきれない層も一定数存在すると考えられる。

設問(11)では、「そう思う」が82.0%と最も高く、授業が受講者の**学習意欲を喚起**していることが分かる。この設問は専門職学位課程の意義に直結するものであり、遠隔授業でもその**効果が十分に発揮**されていると評価することができる。

設問(12)では、「そう思う」、「ややそう思う」は94.7%と高い評価を得ているが、「そう思う」が75.5%、「ややそう思う」が19.2%と、やや満足にとどまる層も存在していることが示唆される。「どちらとも言えない」「ややそう思わない」「そう思わない」が5.4%あることから、授業内容や形式に対する改善の余地があると考えられる。専門職学位課程（遠隔）における授業は、受講者の**主体性・意欲・満足度**の面で非常に高い評価を得ていることが示唆される。特に設問(11)の「学びの広がり・深まり」に関する評価は、**遠隔教育の可能性**を示す重要な指標となっていると考えられる。

観点			(1)学校教育教員養成課程	(2)修士課程	専門職学位課程									
					(3)通学	(4)遠隔								
01	実施趣旨		「教育の内部質保証に関するガイドライン」（平成29年3月31日(独)大学改革支援・学位授与機構）、認証評価、「鳴門教育大学内部質保証方針」等において、教育プログラムが適切に行われていることを確認するための一つの方法として、学生からの意見聴取結果（授業評価等）データを活用した点検・改善が位置付けられている。											
02	回答方式		「Live Campus U」（以下LCU）（ https://lc-nue.naruto-u.ac.jp/lcu-web/ ）の「授業評価アンケート」メニュー											
03	実施手順		- 教務課からLCU連絡にて学生へ依頼 - 各授業担当教員（複数担当の場合は最終授業担当者）から授業時間等に学生へ依頼											
04	実施時期		年間6回程度 06月上旬：前期（前半）授業の最終回時期 07月下旬：前期（後半）授業の最終回時期 08月下旬：前期（集中）授業の最終回時期 11月下旬：後期（前半）授業の最終回時期 12月下旬：後期（集中）授業の最終回時期 02月中旬：後期（後半）授業の最終回時期		年間2回程度 07月：前期終了時期 02月：後期終了時期									
05	実施時間		定期試験を除く授業の最終回のうち10～15分程度		受講完了後適宜									
06	回答期間		アンケート回答依頼日から1週間程度(※LCUメニュー上は年間回答可能)											
07	対象授業		本学担当教員（嘱託講師担当科目も含む）が開設する全ての授業科目（※ただし下表の観点を含む授業科目は対象外とする。） <table border="1"><thead><tr><th>観点</th><th>対象外とする授業科目</th></tr></thead><tbody><tr><td>研究指導でありシラバス対象外科目</td><td> - 卒業研究（学校教育教員養成課程） - 課題研究（修士課程） </td></tr><tr><td>ゼミ指導の科目</td><td> - 教育実践研究（専門職学位課程） </td></tr><tr><td>実質の担当教員が本学教員ではない科目</td><td> - 履修規程における「実習」区分の科目 </td></tr></tbody></table>				観点	対象外とする授業科目	研究指導でありシラバス対象外科目	- 卒業研究（学校教育教員養成課程） - 課題研究（修士課程）	ゼミ指導の科目	教育実践研究（専門職学位課程）	実質の担当教員が本学教員ではない科目	履修規程における「実習」区分の科目
観点	対象外とする授業科目													
研究指導でありシラバス対象外科目	- 卒業研究（学校教育教員養成課程） - 課題研究（修士課程）													
ゼミ指導の科目	教育実践研究（専門職学位課程）													
実質の担当教員が本学教員ではない科目	履修規程における「実習」区分の科目													
08	アンケート項目		別紙「アンケート項目」参照											
09	アンケート結果の取扱い		- 組織的な内部質保証への活用：授業評価専門部会を設置して「授業評価報告書」（全体データ分析中心）を作成し、HP公開及び学内の内部質保証機関へ適宜提供する。 - 教員個人レベルの自己点検への活用：LCU上で、担当科目に係る学生の回答（匿名）の閲覧が可能。同メニュー機能上、教員コメントを入力することも可能。（ただし「授業評価報告書」において授業科目別の情報は表示掲載しない。）											
10	備考		なお、大学間連携等により他大学の教員が開設する授業科目は、別途共同的に授業評価等の内部質保証体制を構成している場合もある（例：連携教職課程科目等）ため、本件学内授業評価とは別に位置付けて整理する。											

学校教育学部教務委員会		
山田芳明	特命補佐	委員長
木村直子	准教授	幼児教育専修
高橋眞琴	教授	特別支援教育専修
江川克弘	教授	学校教育実践コース
余郷裕次	特命教授	国語科教育コース
木口圭子	講師	英語科教育コース
眞野豊	准教授	社会科教育コース
早田透	准教授	算数科・数学科教育コース
福地里菜	准教授	理科教育コース
日下瑠子	講師	音楽科教育コース
家崎萌	准教授	図画工作科・美術科教育コース
湯口雅史	教授	体育科・保健体育科教育コース
美井野優	准教授	技術科教育コース
小野瀬裕子	講師	家庭科教育コース
湯口雅史	教育実習総合支援センター所長	
岩寄伸浩	准教授	教育実習総合支援センター
富士晶次	教務課長	
藤原伸彦	セルフデザイン型学修支援センター所長	
梅津正美	副学長	オブザーバー
－		
－		
－		

大学院学校教育研究科教務委員会		
梅津正美	副学長	委員長
今田雄三	教授	心理臨床コース
岡崎渉	准教授	グローバル教育コース
幾田伸司	教授	国語科教育コース
森山倭成	講師	英語科教育コース
井上奈穂	准教授	社会科教育コース
山中仁	准教授	数学科教育コース
栗田高明	准教授	理科教育コース
宮下晃一	教授	技術・工業・情報科教育コース
西川和孝	教授	家庭科教育コース
山田啓明	教授	音楽科教育コース
山田芳明	教授	美術科教育コース
齋藤祐一	准教授	保健体育科教育コース
田村和之	准教授	教育探究総合コース
岡綾子	准教授	特別支援教育コース
塩路晶子	教授	幼児教育コース
大林正史	准教授	学校づくりマネジメントコース
池田誠喜	教授	生徒指導コース
竹口幸志	准教授	学習指導力・ICT教育実践力開発コース
松浦昌宏	准教授	教員養成特別コース
湯口雅史	教育実習総合支援センター所長	
富士晶次	教務課長	



学生による授業評価専門部会		
日下瑠子	講師	音楽科教育コース
美井野優	准教授	技術科教育コース
江川克弘	教授	学校教育実践コース
今田雄三	教授	心理臨床コース
幾田伸司	教授	国語科教育コース（主査）
竹口幸志	准教授	学習指導力・ICT教育実践力開発コース

年度	月	学校教育学部教務委員会 大学院学校教育研究科教務委員会	学生による授業評価専門部会
令和6年度	4月	 各専門部会の設置	
	5月	 授業評価実施（前期前半分）	
	6月		 R6第1回専門部会
	7月	 授業評価実施（前期後半分）	
	8月		
	9月	 授業評価実施（前期集中分）	 R6第2回専門部会
	10月		
	11月	 授業評価実施（後期前半分）	
	12月		
	1月	 授業評価実施（後期集中分）	
	2月	 授業評価実施（後期後半分）	
	3月	 R6授業評価集計	
令和7年度	4月		
	5月		 R7第1回専門部会
	6月		 本報告書(案)の作成
	7月		 R7第2回専門部会
	8月		
	9月	 本報告書の確定・HP公表	
	10月		
	11月		
	12月		
	1月		
	2月		
	3月		

授業評価報告書 2024

発行日 2025(令和7)年9月3日

編集 鳴門教育大学学校教育学部教務委員会
鳴門教育大学大学院学校教育研究科教務委員会

発行 国立大学法人鳴門教育大学
住所 〒772-8502徳島県鳴門市鳴門町高島字中島748番地
TEL 088-687-6194
URL <https://www.naruto-u.ac.jp/>